

111 学年度第一学期ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座
「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」シリーズ講座 (4)
テーマ：文学、生命

中国文化大学 111 学年度ユーラシア財団 (from Asia) 国際講座の第四回目は、成功大学中国文学科教授の王翠玲先生による「文学、生命」というテーマでの講演であった。王先生は本題に先立ち、「生命の滋味—良き始まりと良き終わり」、「平凡な奇跡—生命は奇跡である」、「死は傍にあり、生は傍にある」という三本柱を提示し、「文学、生命」の饗宴の主軸を予告した。そして文学、儒教、仏教、道教の観点から人生について論じてシンプルな言葉で説いた。このシェアは講演者自身の問題ではなく、聴衆との共鳴的な交流であると述べた。

「文学、生命」の定義

まず文学を以下の 3 点で定義する。

- (1) 文：文字、文学、文化、文明
- (2) 学び：学び・習う→温故知新
- (3) 文学：表現・表現媒体、
 - ・口頭伝承、グラフィック、回顧録、ヒエログリフ、詩歌、文学……
 - ・芸術、多文化表現
 - ・純文学、狭義の文学、広義の文学
 - ・2016 年のノーベル文学賞は「アメリカの歌の伝統の中で新しい詩的表現を創造した」として、アメリカのシンガーソングライター、ボブ・ディランに授与された。

「生命」を定義するとき、最初に「生命」を文字通りサバイバルライフ、人生の態度と説明し、「生命の形態と進化」と「生命の含意と究極の関心」の精緻化に焦点を当てた。

「生命」の形と進化

まず、有形無形の人生について王先生は語った。

- ① 有形：具体的（具体的で目に見える身体的生命を伴う）

見えるものは見やすく、見えないものは難しい。見えない人は、隙間で生き残ろうとするのではなく、見える世界と見えない世界の 2 つの世界を繋ぎ、ドアの内側と外側の見える世界のプラットフォームになる方法について、十分な想像力を持たなければならない。
- ② 無形：抽象的（空虚、混沌、無極、太極など）

劉安の「淮南子」：「古代では、これは宇宙と呼ばれ、上下の 4 つの方向は宇宙と呼ばれている。」ここで宇宙は空間を指し、同時に時間も指す。

時間の長さのために、我々の寿命は限られており、そこに生と死がある、と信じる。空間には限界があるので、我々の身体は自由に動くことができず、空間に入り込むことができない。時間と空間は我々にとって保護と制限であり、限定された時間と空間で無限の可能性を生きることを可能にする。生命の長さは限られているので、その長さを制御することはできないが、幅や高さ、密度を変えることはできる。

また、ドイツのミシュランシェフであるドルト・シッパー、ハーバード・ビジネス・スクールのクリステンセン教授、オーストリアの物理学者だったシュレディンガーを例に挙げ、生命のプロセスとその意味を説明した。この問題について述べる時、王先生は、あらゆる分野の人々が人生について話し合っており、我々の生活には満足できないことがよくあると語り、幸せになる方法がない時に我々が何をすべきか？と問い掛けた。挫折すればするほど人は勇敢になり、すべての運に感謝する。我々は苦しむたびに、その苦しみに感謝する。運も苦しみも人生の一部となり、限りある時間と空間の中で無限の可能性を生きることを楽しむのである。

「生命」の含意と究極の関心事

生命の含意について話すとき、王先生は、生命には持続可能な管理が必要であると指摘した。生命の持続可能な管理のプロセスには、次の3つの意味合いがある。

- (1) 価値観：評価、主流。
- (2) 自分：小さな自分、大きな自分 ◇バタフライ効果
- (3) 洞察力：己と敵を知る◇カオス

我々は自分自身に耳を傾け、自分自身の洞察を必要とする。我々が中心点である場合、我々は自分自身から外界を理解し、他者を理解する必要がある。その過程で様々な人生戦略が浮上するが、その場合、主流派の意見に耳を傾けるか、それとも敢えて自分の道を進むか？これは我々が決めることである。誰も我々が人生を選択するのを助けることはできない。我々は時々刻々と感じていることがあり、それは自分が一番大事だということ。幼少期から大人になるまで我々の行動は他者に影響を与える。仮に疫病のように自分では影響を与えないと思っていたことでも知らず知らずのうちに他者との密接な関係に陥ってしまう可能性がある。すべての思考にはバタフライ効果がある可能性があるため、我々は単一の思考に注意する必要がある。混沌の中で自分の位置を明確に見て、そこから生命の中心を導き出すにはどうすればいいのか？

生命一天と地と人

古代人は子供の頃から「千字文」、「三字経」、「幼學瓊林」を学び、未知の

天地と太陽、月、星を生活環境から学び、互いに影響し合っていた。天と人の一致は儒教が人々に期待することであり、道教の究極の目標は、人々が虚に生き、永遠に生きることであり、仏教徒は、すべての人に仏性があり、本質的に純粋な心を持っていると言う。人々が自分自身を絶対的に小さく描くことを厭わない限り、絶対的に大きくすることができる。儒教、仏教、道教の3つの宗派には、それぞれ独自の優先事項があり、人々を非常に真剣に受け止めている。誰もが自分も他人も無視しないで どんな命も大切な存在で、既に持っている宝物を最大限に活かすということは、今の言葉で言えば「小さな自己（個）→→集団の自己→→大きな自己」ということになるのだ。

以上が王先生による生命の概念で表現した「生存、生活、生命、生態」である。

（ウェブサイト：<https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>）

（原文：涂玉盞 日本語文学科副教授、日本語翻訳：齋藤正志 日本語文学科教授）